

# 遠江・駿河の鎌について

—藤枝市寺家前遺跡出土の柄付鎌の評価をめぐって—

大谷 宏治

**要旨** 弥生時代後期の可能性が指摘される藤枝市寺家前遺跡出土の木製柄付鎌は、東日本で弥生時代に位置づけられる鎌の類例が少ない中で、同時期の地域内の比較だけで弥生時代後期に位置づけるには課題があることから、まず遠江・駿河地域出土の鉄鎌と鎌柄の編年的位置づけを確認したうえで、寺家前遺跡出土例を各時期の資料と比較検討することで弥生時代後期に位置づけた。その後全国的な鎌柄の資料との比較を通じて、鎌柄のおおよその編年観を示し、弥生時代後期に位置づけられることを再確認した。これにより、寺家前遺跡の木製柄付鎌が木柄と鉄鎌がセットとして残存する全国で最古の事例である可能性が高まった。

**キーワード**：柄付鎌（木製柄付鎌） 曲刃鎌 直刃鎌 鎌柄の分類 弥生時代～奈良時代 寺家前遺跡

## 1 はじめに

藤枝市寺家前遺跡（静岡県埋文センター2012・2013・2014a・b）の性格不明遺構SX610（あるいはB610）出土の木製柄付鎌は、弥生時代後期（弥生時代後期末～古墳時代前期初頭）に帰属する可能性が指摘されている（静岡県埋文センター2013、中川2011、註1）。古墳時代を勉強する筆者としては、古墳時代研究での鎌の変遷観から静岡県内での曲刃鎌の出現は古墳時代中期以降と考えており、即座に納得できる見解ではなかった（註2）。また、資料を集成する中で、寺家前遺跡例が弥生時代後期の柄付鎌であるとすれば、現存する柄付鉄刃鎌として日本最古の例にあたる可能性もあることが判明したことから、鎌・鎌柄の類例を分析した上で慎重に位置づける必要性を感じた。

小論では、まず静岡県内の鎌について鉄刃と鎌柄に区分して時期的位置づけを確認する。さらに鎌柄については『木器集成図録』（奈文研1993）等に筆者が確認できた事例を加え、静岡県で想定される鎌柄の形態的変遷が全国的な動向と合致しているかの確認を行い、最終的に筆者の寺家前遺跡の鉄鎌の位置づけについて述べたい。

## 2 鎌の研究史

### （1）鉄鎌（鉄鎌刃）

既往の研究では弥生時代中期に鉄製鎌（曲刃鎌）が出現したと想定され、弥生時代を通じて曲刃鎌が主体となる（松井1985・1993・1994ほか）。この時期の曲刃鎌は個性が強く、形態差が大きい。その様相が変化するのは古墳時代前期で、日本列島に固有の短冊形直刃鎌が盛行する（松井1994、河野2014）。ただし古墳

時代前期に少ないながらも曲刃鎌が存在しており、直刃鎌と共に存する（寺澤1991、河野2011）。一方、古墳時代中期以降再び曲刃鎌が増加し、中期中葉以降直刃鎌が衰退し、曲刃鎌が盛行することが示してきた。

したがって、鉄鎌については、まず形態的に個性の強い曲刃鎌が弥生時代中期に出現し、弥生後期に増加する。弥生時代末～古墳時代初頭ごろに、日本固有の短冊形直刃鎌が出現するにあたり、曲刃鎌が一時的衰退し、古墳時代中期以降再び曲刃鎌が主体的に用いられ、茎をもつ曲刃鎌が出現するまで盛行することが明らかとなっている。

また、鎌は形状よりも大きさに用途（機能）が反映し、刃部の形状ではなく、大きさを基準に分類するほうが有効的であると考えられている（松井1993、寺澤1991）。なかでも寺澤薰氏は、現在の鎌刃の種類と比較することで直刃、曲刃という形態差よりも刃弦長（刃長）に機能差が現れていることを指摘し、刃弦長により鎌刃を3種（大・中・小）に分類している。小型は、全長10～12cm以下、刃幅2cm以下、刃渡り8～10cm以下、中型は全長12～18cm前後、刃幅は2～3cm、刃渡り10～16cm、大型は全長20cm程度以上、刃渡り17cm以上、刃幅3cm以上とした。各種類の用途は小型は「穂切り鎌」、中型は「刈鎌」（主に稲の根刈鎌）、大型は「除伐用大鎌」に位置づける（寺澤1991）。その上で寺澤氏は、弥生時代中期後半に北部九州でまず大型鎌が出現し、つづく弥生後期に北部九州で中型鎌が出現するものの、稲穂は手鎌で摘み取られる傾向にあること、根刈鎌の普及は九州とその周辺地域にとどまっており、近畿地方以東にはほとんど普及しないことを明らかにした。また、手鎌による穂首刈が優勢で

ある傾向は古墳時代中期頃まで継続していたことを明らかにした（寺澤1991）。

## （2）鎌柄

上原真人氏は『木器集成図録近畿原始篇』の解説において、鎌「柄はまっすぐなものが多く、（中略）屈曲気味になるのは6世紀後半以降」、弥生時代の鎌柄は柄頭の「突起が顕著で、時期が降ると退化する。8世紀以降の鎌柄では、突起は痕跡を残すにすぎない」、「弥生～古墳時代の装着孔は柄と直交し、奈良～平安時代の装着孔は柄と鈍角をなす例が多い」ことを指摘している（上原1993）。また、鎌柄には全長30～50cm弱と60cm以上の柄が存在すること、前者を通常の「鎌柄」、後者を田圃に残った稻藁を刈り取る「大鎌（薙鎌）」柄であった可能性が高いことを指摘している（上原1993）。

中川律子氏は、藤枝市寺家前遺跡出土の柄付鎌の位置づけを探る中で、静岡県内出土の弥生時代の鎌柄の類例を挙げ、浜松市角江遺跡や静岡市有東遺跡等と類似することを指摘し、寺家前遺跡の柄付鎌を弥生時代後期（報告書では、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭）に位置づけた（中川2011、静岡県埋文センター2013・2014b）。

鎌柄は、全体的な形態によるおおよその時期的変遷が示されるが、類例数が少ないため、必ずしも時期的変遷が明確になっているわけではない。また、鉄鎌の装着角度により、下草刈りの「除伐鎌」（寺澤1991）、刈鎌などに区分できる可能性があるが、実際に鎌柄に装着された状態で出土した鎌は、装着孔の角度に規制されることなく、鉄鎌が挿入されているものもあり、鎌の折り曲げや装着孔の角度から鎌の機能を特定することは難しいことが指摘されている（寺澤1991）。

## 3 遠江・駿河出土の鉄刃鎌について

### （1）鎌刃、鎌柄の名称と分類

まず、分析を始める前に、本書で使用する柄付鎌の部位名称などについて定義したい（図1）。

**鎌刃の分類** 鎌刃は、茎を有するもの（有茎式）と、茎がないものに分類する（無茎式）に区分する。

小論は鎌の機能解明を目指すものではないため、機能差を示すとされる寺澤薰氏の分類に準じて大きさにより大・中・小型に区分する（寺澤1991）。また、刃が湾曲する曲刃鎌と、直線的な（短冊形の）直刃鎌に分類する。

なお、以下で鎌とした場合は、鉄鎌刃のことを指し、

木製あるいは石製鎌刃の場合は、木鎌（木刃）・石鎌と表記する。

**鎌柄の部位名称** 鎌柄は鉄鎌刃などを装着する木柄である。柄の上部を柄頭、手に持った際に外れにくくするグリップ部分を柄尻とし、その中間部分は柄身とする。鎌刃を装着する部分を装着部とする。

**寺家前遺跡出土柄付鎌の特徴** 寺家前遺跡出土の柄付鎌について、その特徴を記しておきたい（註3）。

鎌刃は甲類（刃を下に向かうときに右側を手前に折り曲げる）であり、刃幅全体をL字形に折り曲げる。刃は曲刃であるが、棟（背）側は直線的で先端部が嘴状に曲がるもので、刃部は使用されたことによりやや内湾度合いが大きくなっている可能性がある。大きさは、残存長13.7（想定復元長14.0cm、復原刃渡りは11cm）、刃幅（基部付近）3.1cmである。この大きさは、上述した寺澤薰氏分類の中型に該当する。

鎌柄は、グミ属を加工して製作されたものである。装着部を柄身よりも幅広に作り、柄身と装着部には明瞭な段差が設けられている。柄頭は装着部よりもさらに幅広に作られる。後述する鎌柄Ac類に該当する。柄尻は欠損しており不明であるが、他の多くの事例と同様柄身よりも大きく作っていた可能性が高い。残存長30.3cm、柄身は直径1.7cm、装着部幅1.7cm、柄頭幅4.5cmである。装着部から柄頭の長さは9.5cmである。元来の全長は40cm前後に復原されよう。上述した上原真人氏分類の通常の鎌柄に位置づけることができる可能性が高い（上原1993）。

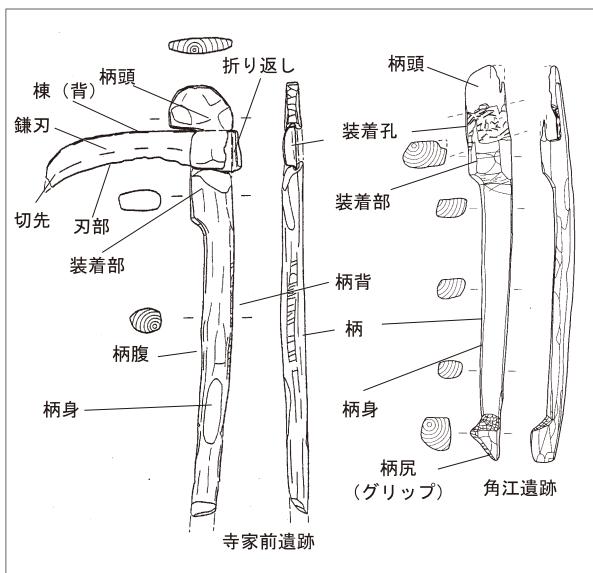


図1 柄付鎌の部位名称

## (2) 遠江・駿河の鉄刃鎌について

弥生時代の遺跡から出土した鉄製品については近年竹内直文氏（竹内2000）、杉山和徳氏（杉山2011・12）により集成が行われており、鎌刃で明確に弥生時代に位置づけられるものはほとんどなく、森町峯山台状墓と静岡市川合遺跡例のみである。ただし、前者は時期が新しい可能性がある。後者は形態的特徴から手鎌で、小論で検討する柄付鎌ではない可能性がある。したがって、両者とも弥生時代の鎌として位置づけるには課題がある。

遠江・駿河地域内では、古墳時代以降、鎌の出土が増加し、古墳前期～中期までは副葬品として出土することが多いが、後期以降副葬数は減少する。奈良時代以降は集落から出土することが多くなり、数量は増加する。これらの鉄鎌について時期毎に弥生時代から奈良時代までみておきたい（図2）。

**弥生時代の鎌** 弥生時代に位置づけられる鎌は、静岡県内でいくつか確認されている。

まずは、静岡市有東遺跡で、木製曲刃鎌が挙げられる（註4）。弥生時代中期後葉（以下、弥生時代、古墳時代の時代区分を示す場合には、時期をとって記載する）に位置づけられる。弥生中期に位置づけられる鉄鎌は確認されていない。

弥生後期後半では、静岡市川合遺跡、森町峯山台状墓出土例が挙げられ（杉山2011）、後期末～古墳前期前半では、袋井市愛野向山II遺跡（註5）、磐田市梵天遺跡出土例がある。川合遺跡出土例は腐食が進行し詳細が不明確であり、切先とされる図の左側部分が手前に湾曲しはじめていることから手鎌の可能性も排除できない。鎌とすれば直刃鎌である。峯山台状墓例は形状が不明確である上、出土地点近くからは古墳中期～後期の土器が出土しており、必ずしもこの時期に位置づけられるかどうか不明確である。切先が失われていることから曲刃鎌か直刃鎌か不明確であるが、後者の可能性が高い。

一方、愛野向山II遺跡例、梵天遺跡例とともに直刃鎌であり、つづく古墳前期後半以降の直刃鎌と同様の形状を呈するものである。

**古墳時代の鎌** 古墳前期中葉～後葉では、浜松市赤門上古墳などで出土しており、いずれも直刃鎌である。

古墳中期前半では、掛川市浅間神社古墳、菊川市八幡ヶ谷古墳で曲刃鎌が出土し、中期中葉の磐田市堂山古墳、袋井市五ヶ山B2号墳、菊川市長池4号墳で曲刃鎌が直刃鎌と共に伴している。

中期前半～中葉の古墳では直刃鎌と曲刃鎌が併存しているが、中期後葉以降の古墳には直刃鎌は副葬されていないため、中期後葉以降は再び曲刃鎌に一本化された可能性が高い。中期前半～中葉の曲刃鎌は、背部分は直線的で、先端が嘴状に屈曲するものである。

つづく古墳後期以降、鎌の副葬は減少し、出土量が減少するが、浜松市半田山古墳群や富士市中原4号墳などで出土している。刃部側、棟側とともに弧を描くものとなり、中期よりも全体的な湾曲が大きいものが多くなる印象を受ける。

**奈良時代の鎌** 基本的に古墳時代後期と大きな変化は確認できない。曲刃で、鎌柄に装着する部分を一部折り返すものである。

図2には図示していないが、平安時代から鎌倉時代にかけて有茎式の鎌が出現し、盛行していくと想定できる。

## (3) 寺家前遺跡の鉄鎌の位置づけ

**寺家前遺跡の鉄鎌** 寺家前遺跡の鎌は、刃部は使用によりすり減ったかのように湾曲が大きくなっている可能性が高く、棟はほぼ一直線であり、先端部分が嘴状に緩やかに曲がるものである。

遠江・駿河の鉄鎌の形態的な変遷を考慮すれば、曲刃鎌である寺家前遺跡例は、古墳中期以降に位置づけられる形態である。ただし、弥生後期以前の鉄鎌が確認でないため、その時期の鉄鎌である可能性を排除できない。一方で、棟部まで弧を描くようになることが多い（寺澤薰氏によるE／F類、寺澤1991）古墳後期以降のものとは若干形態が異なるようであり、遠江・駿河では未知の弥生時代後期～末に位置づけられるか、古墳中期以降に位置づけられる可能性が高い。

**弥生時代～古墳時代前期の曲刃鎌** 遠江・駿河の事例のみでは寺家前遺跡例の位置づけは難しいことから、寺家前遺跡例が古墳前期以前に位置づけることが可能かどうか確認したい。

日本列島で採用された初期の鉄鎌は、弥生中期～後期で曲刃鎌である。弥生後期末から前期初頭に日本列島独自の形態である短冊形直刃鎌が主体的に用いられるようになるが、曲刃鎌も存在している（河野2011、寺澤1991）。弥生時代の曲刃鎌は形態的なバラエティに富んでおり（図3）、規格的に生産されていた可能性は低い（寺澤1991）。河野正訓氏が取り上げた弥生中・後期～古墳前期の曲刃鎌の形態（図3、河野2011）と比較すると切先の形状などは異なるが弥生時代の福岡

	曲刃鎌		直刃鎌	
弥生中期	1 藤枝寺家前遺跡 2 静岡有東遺跡 3 森峯山台状墓 4 磐田梵天遺跡 5 静岡川合遺跡 6 袋井愛野向山II遺跡 7 浜松赤門上古墳 8 浜松権現平山7号墳 9 静岡三池平古墳 10 掛川浅間神社3号墳 11 菊川八幡ヶ谷古墳第1主体部			
弥生後期	曲刃鎌採用?		 古墳中期以降の可能性あり	 寺家前遺跡出土柄付鎌(1:8)
古墳前期			    直刃鎌主体	 手鎌の可能性あり
古墳中期	   曲刃鎌主体	  直刃鎌・曲刃鎌併存	    衰退	
古墳後期～終末期	  	 		12・14 菊川八幡ヶ谷古墳 第2主体部 13 磐田堂山古墳 15 袋井五ヶ山B2号墳 16 菊川長池4号墳 17 藤枝若王子7号墳 18 藤枝若王子19号墳 19 掛川堀之内13号墳 20 浜松半田山C26号墳 21 浜松半田山D21号墳 22 島田白岩寺2号墳 23 藤枝越ヶ谷B7号墳
奈良以降	 	 		24・25 浜松伊場遺跡 26・27 富士東平遺跡 28 静岡瀬名遺跡 1・3～27 0 (1:6) 10cm 2・28 0 (1:15) 20cm

図2 遠江・駿河における鎌の変遷

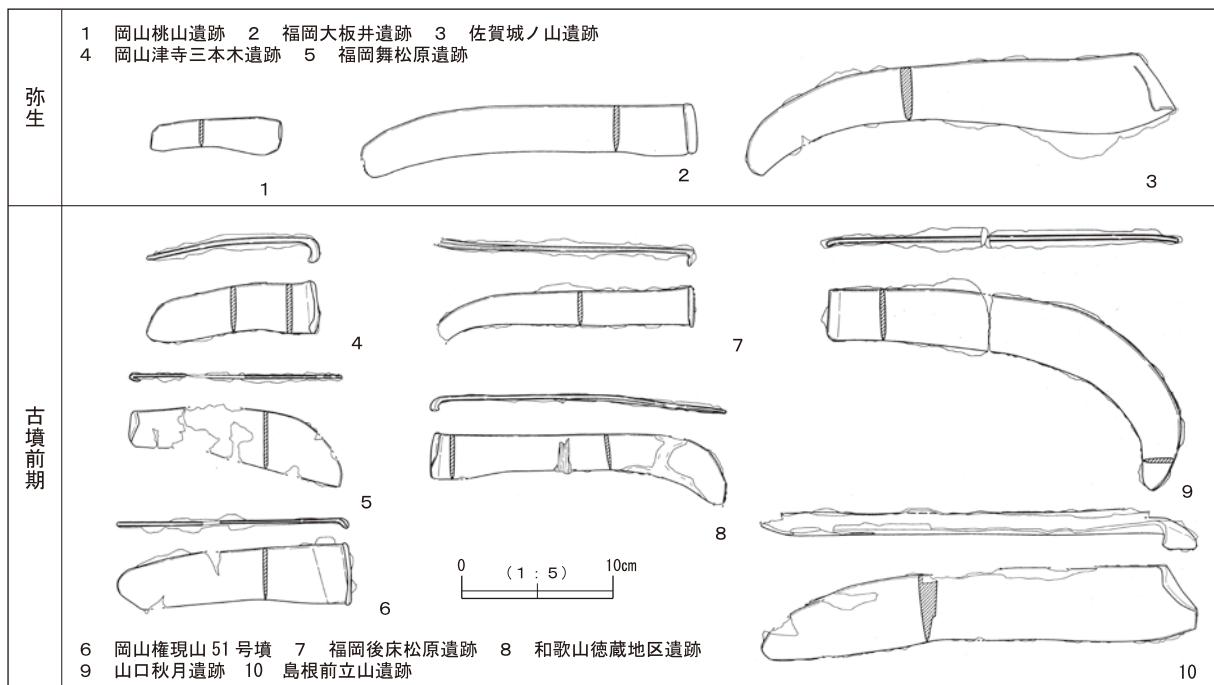


図3 弥生時代～古墳時代前期の曲刃鎌（河野2011より）

県大板井遺跡例や岡山県桃山遺跡例に類似し、古墳前期では、福岡県後床松原遺跡や和歌山県徳藏地区遺跡出土例に類似するように見えることから、断言することは難しいものの寺家前遺跡例は、遠江・駿河では曲刃鎌の類例が知られない弥生後期～古墳前期に位置づけられる可能性を十分に想定できる。

#### 4 鎌柄の分類

上述したように鎌刃のみでは時期を特定することが難しいため、ここでは鎌柄の分析を行ないたい。

まず、分析に先立って、鎌柄の形態的な分類を定義したい（図4）。

**鎌柄の分類** 鎌柄は単純な形態であるが、遠江・駿河の鎌柄の集成を行う中で鎌柄を分類することが可能であると判断し、下記の通り分類する。

まず、鎌刃と柄を同一の木材で作成する「一体作り」と、鎌刃と別作りの鎌柄を組み合わせる「組合せ式」に区分する。さらに後者を、柄の形態・鎌刃の装着方法から大きく4種類に区分する。なお、A～C類は大きく「（鎌刃）挿入式（I式）」、D類は「（鎌刃）落とし込み（差しこみ）式、II式」と大きく区分することができる。

**A類** 柄孔（以下、装着孔）を挟って鎌刃を装着するもので装着部・柄頭を柄身よりも幅広あるいは厚手に作るもの。

**Aa類** 装着部と柄頭に明瞭な区画がないもので、

柄身と装着部の境界が撫闇のもの。静岡市有東遺跡例・浜松市梶子遺跡例など。

**Ab類** 装着部と柄頭に明瞭な区画がないもので、柄身と装着部の境界が直角に近いもの。浜松市角江遺跡例など。

**Ac類** 装着部よりも柄頭が大きいもので、柄腹側の幅を広げるもの。藤枝市寺家前遺跡出土例など。

**Ad類** 装着部全体を柄身より大きく作り、柄背側の幅を広げるもの。柄身が背側に屈曲するものが多い。滋賀県湖西線関係遺跡例など。

**B類** 柄身に装着孔を挟って鎌刃を装着するもので柄頭のみを柄身よりも大きく作るもの。浜松市恒武山ノ花遺跡例など。

**C類** 柄身に装着孔を挟って鎌刃を装着するもので全体が棒状で、柄頭と柄身の明瞭な区分のないもの（装着部と柄身の厚さもほぼ同一）。

**C1類** 柄頭が柄身と比較してやや幅広につくられるもの。静岡市神明原元宮川遺跡例など。

**C2類** 柄頭と柄身がほぼ同幅のもの。

**D類** 柄身が直線的で、柄頭に鎌刃の茎を嵌めための切り込みを入れるもの（柄穴を穿つもの）。ただし、弥生時代や古墳時代のものについては、頭部が欠損している、あるいは未製品で頭部がさけている可能性もあることを念頭に

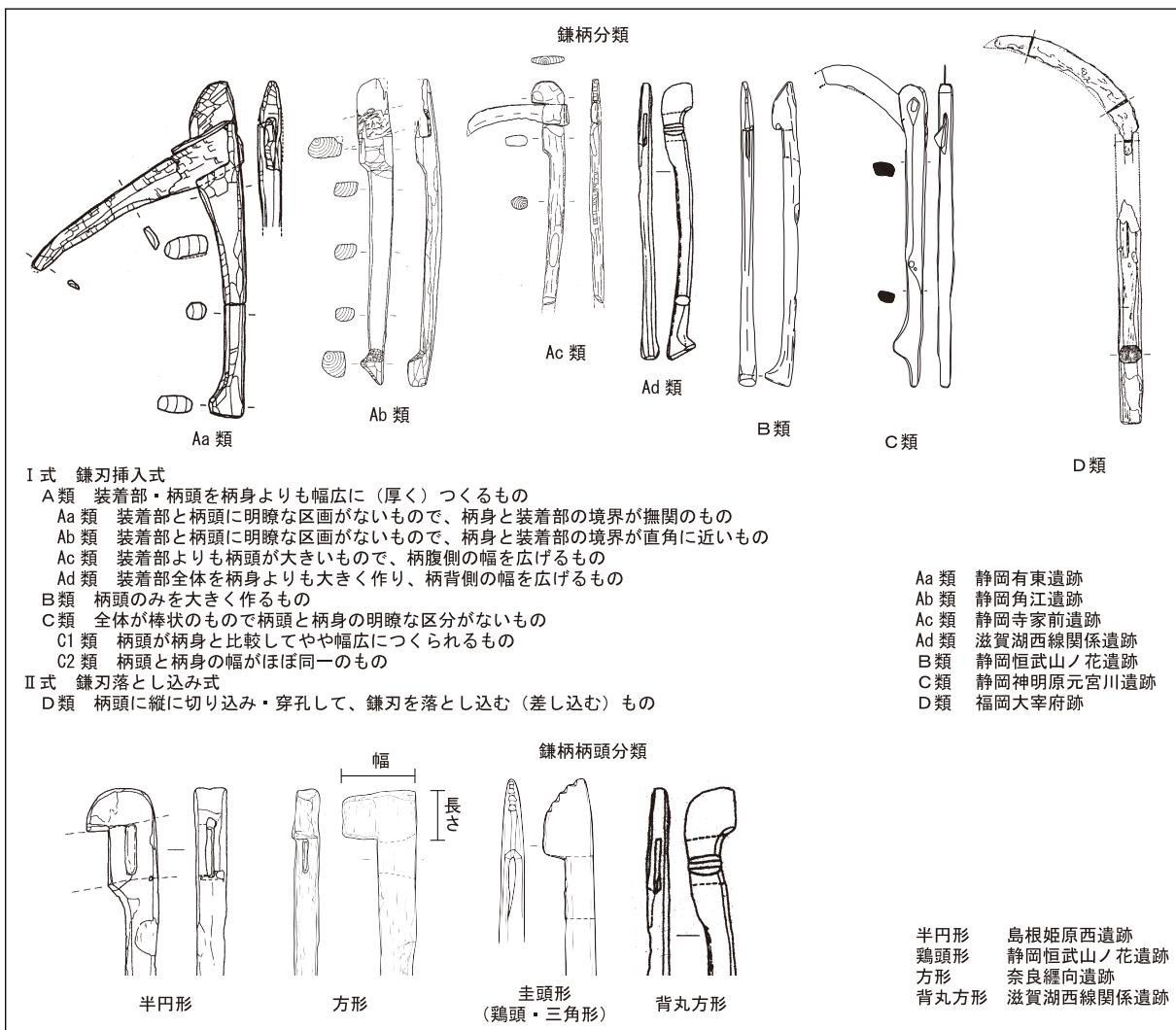


図4 鎌柄形状と鎌柄柄頭の分類

置く必要がある。浜松市角江遺跡などの事例から弥生時代後期には存在している可能性がある。

**Da類** 茎のない鉄刃を落とし込み、紐等で固定するもの。

**Db類** 茎のある鉄刃を差し込むもので、口金（責金具）等で固定するもの。

**柄頭の分類** 柄頭を柄身より大きく作る Ab・Ac・Ad類と B 類の柄頭の形状を下記のとおり 4 種類に分類する。

**半円形** 寺家前遺跡例・島根県姫原西遺跡例

**方形** 奈良県纏向遺跡例

**圭頭（鶴頭・三角）形** 恒武山ノ花遺跡例ほか

**背丸方形** 滋賀県湖西線関係遺跡

なお、方形と圭頭形の境界を明確に区分することは難しく、おおむね長さが幅より短いか同じ程度のものを方形、長さが長いものを圭頭形とする。

**鎌刃の装着角度の分類** 角度は鎌刃の刃部と柄身の装着角度であり、鎌刃の装着角度について下記のとおりとする。実際に鎌刃が残存しているものが少ないことから、装着孔の割り抜き角度で推測するものが多い(註6)。

**鋭角** 85度未満のもの。

**直角** 85~95度前後のもの。

**鈍角** 95度以上のもの。

## 5 鎌柄の編年的位置

### (1) 遠江・駿河における鎌柄の変遷

ここでは寺家前遺跡例を除いて、各時期の鎌柄についてみておきたい(図5)。

**弥生時代の鎌柄** 静岡市有東遺跡と浜松市梶子遺跡で中期後葉に位置づけられるAa類が出土している。鎌柄の形態は、装着部と柄身は明瞭な段差ではなく、斜角(撫角)である。

弥生後期に位置づけられるのは、浜松市岡の平遺跡のAa類、浜松市角江遺跡出土の鎌柄Ab類である。前者は柄身と装着部の幅が不明瞭であるが装着部を柄身よりも厚く作ることから、Aa類に区分する。後者は柄身と装着部に明瞭な段差があるので、柄頭と装着部は同幅である（註7）。また、角江遺跡では鎌刃と柄を一体作りにした木刀鎌が出土している。

弥生時代の（組合せ式の）3例の鎌柄は装着部を柄身より大きく作ることが特徴である。また、装着孔は鎌柄を鋭角あるいは直角に装着するのに適したあけ方が施されている。

**古墳時代の鎌柄** 古墳前期に位置づけられる事例がなく、弥生時代からの変遷過程が不明確であるが、古墳中期中葉以降に位置づけられる事例が確認できる。中でも浜松市恒武遺跡群（山ノ花遺跡・西浦遺跡）で古墳中期に位置づけられる鎌柄が多数出土している。これらは基本的にB類で柄頭の形状は圭頭形（直角三角形に近い形状を含む）で、鎌柄はB類に限定される。鎌は柄に対して直角に装着するのに適した（柄身に直交）状態であけられており、鎌は直交して装着されていた可能性が高い。

古墳後期～終末期でも、静岡市神明原・元宮川遺跡例などをみると、基本的にB類であった可能性が高い。ただし、中期のものと比較すると柄頭幅が狭くなっている。この点を重視すれば、古墳後期には柄頭と柄身が同幅のC類が出現していた可能性が高い。柄頭幅が狭くなるのは、鎌刃の柄頭へのかかりを小さくし、可動域を大きくするための工夫であった可能性が高い。

**奈良時代以降の鎌柄** 奈良時代以降に位置づけられる鎌柄は、基本的にB類あるいはC類である。B類は古墳後期～終末期のものと比較してさらに柄頭幅が狭くなっている。装着孔は直角・鈍角に鎌刃を装着するに適した方向にあけられている。それとともに柄頭がさらに小さくなつたことから、刃の装着角度を自在に変更することができるに適した形状といえ、古墳時代後期以降連続的に採用されていることがわかる。

一方、浜松市伊場遺跡では、8世紀に位置づけられているAb類が出土している。この例から装着部を柄身よりも大きく作るものが存在している可能性がある（註8）が、これまでのところ遠江・駿河ではA類は基本的に弥生時代のもので、古墳時代には現状で確認できない形状であるため、この形状が弥生時代から奈良時代へと連続して採用されていた可能性は低い。

**遠江・駿河の鎌柄の変遷** 遠江・駿河の鎌柄の変遷

からは、鎌刃装着部を補強するため柄身よりも装着部を幅広く形成する（弥生中期）。第二段階として、鎌刃が柄頭側へずれるのを防ぐため柄頭を大きく作る（弥生後期）。第3段階として、鎌刃のずれが柄頭を大きく作ることで防げるようになったため、装着部を幅広く作る必要がなくなり、柄身と装着部を同じ幅にし、柄頭のみを大きく作るようになる（古墳前期以降）。第4段階として、鎌刃を鈍角に装着するため柄頭の大きさが減少し（古墳中期以降）、第5段階として、柄頭から柄身まで同幅となる（古墳中期以降か）。小論では取上げなかったが、これまでの研究を踏まえれば、第6段階として、鉄刃に茎を有するものが出現し、柄頭の上部から刺し込み、責め金具（口金）で固定するようになるという変遷過程が想定できる。

## （2）弥生時代～古墳時代の鎌柄の変遷

本章（1）で検討した遠江・駿河の鎌柄の特徴が他地域の鎌柄と軌を一にしているかどうかについて全国的な鎌柄の変遷を確認しておきたい。木製品の出土は多いものの、鎌柄の出土は意外と少なく、同一地域内での変遷を追うことは難しいため、静岡県埋蔵文化財調査研究所ほかが主催した『農具の変遷』シンポジウム資料集（静岡埋文研ほか1994）や『木器集成図録』（奈文研1993）、『島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』（島根県古代文化センター・島根県埋文センター2006）、『大和木器資料I』（檀原考古学研究所2000）などに掲載された鎌柄を形態的な特徴を踏まえて時期ごとに並べた（図6）。

**弥生時代** 弥生時代例では筆者が調べられた限りで全体的な形状が分かるものは、神奈川県池子遺跡（1-A地点）の弥生中期後葉の宮ノ台期に位置づけられる組合式木刀鎌と福岡県比恵遺跡群の弥生中期初頭前後の石鎌か斧柄とされる木柄のみである。前者は挿入式ではなく、基部を太く作り、その太く作った部分に柄身に平行して穿孔して鎌刃に柄を挿入するもの（註9）、鎌刃挿入式のものとは特徴が大きく異なっており、直接的な連続性はうかがえない。後者は、Aa類であり、静岡県梶子遺跡例に類似する。これが鎌柄であるとすれば、現状で最古の鎌柄の可能性が高い。

後期には装着部を柄身より大きく作るA類（Aa・Ab・Ac類）と柄頭のみを大きく作るB類の2者が確認できる。また、D類も存在していることが指摘されている（上原1993）。A類は佐賀県吉野ヶ里遺跡（佐賀県教委2003）でAa類、Ac類、福岡県惣利遺跡でAa

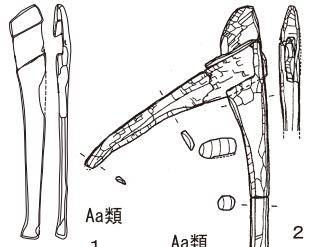
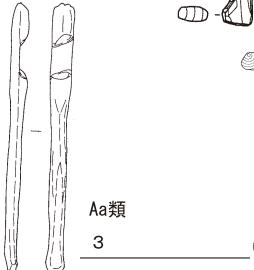
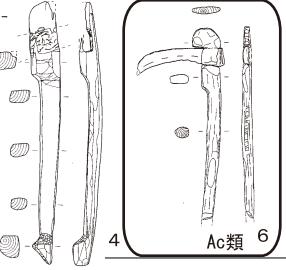
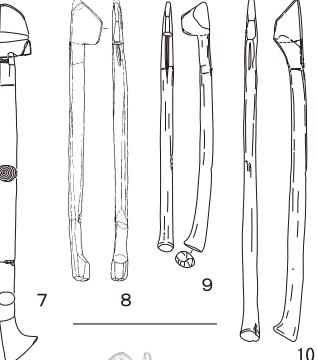
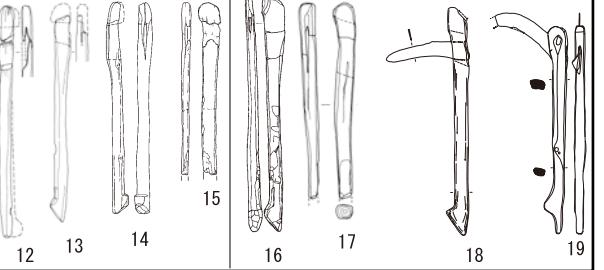
	鎌柄Aa類	鎌柄Ab類	鎌柄Ac類	鎌柄B類	鎌柄C類
弥生中期					
弥生後期					
古墳前期					
古墳中期					
古墳後期 終末期					
奈良以降					

図5 遠江・駿河における鎌柄の編年的位置

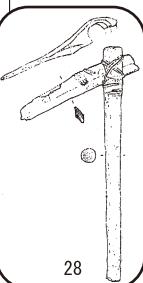
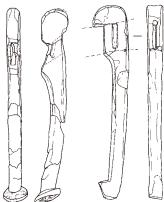
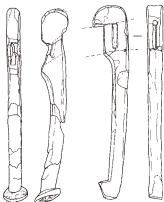
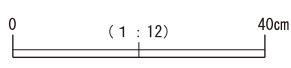
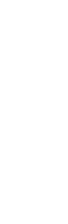
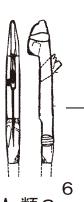
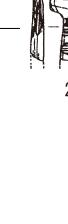
	鎌柄Aa類	鎌柄Ab類	鎌柄Ac類	鎌柄Ad類	鎌柄B類	鎌柄C類
弥生中期						
弥生後期	1 	2 	3 	4 	5 	9 
古墳前期	断絶？ 	断絶？ 		10 	11 	12 
古墳中期	0 	1・2 福岡比恵遺跡群 3・4 佐賀吉野ヶ里遺跡 5・27 島根姬原西遺跡 6 大阪小阪遺跡 7 滋賀湖西線関係遺跡 8・22 京都石本遺跡 9 千葉國府関遺跡 10 大阪西岩田遺跡 11 島根田中谷遺跡 12 佐賀川寄吉原遺跡 13 石川二口八丁遺跡 14 千葉國府関遺跡 15 奈良纏向遺跡	13 	14 	15 	16 
古墳後期	16・24 愛媛福音寺遺跡 17 愛知勝川遺跡 18 京都古殿遺跡 19 千葉菅生遺跡 20 山形西沼田遺跡 21 千葉床代遺跡 23 大阪長原遺跡 25 福岡板付遺跡 26 奈良平城京跡 28 神奈川池子遺跡	6  Ac類？ 柄身の屈曲が始まる	7 	Ad類 8 	20 	21 
飛鳥～奈良	※6については、柄身の途中で段差が設けられているが、弥生時代に位置づけられるものと比べると段がつく位置が低く、段差も小さいため、B類に近い形態とることができる。 ※27について、C類の可能性があるが、完形品ではないことから、姫原西遺跡で出土した他の鎌柄の柄身の幅を考慮すると装着部を大きくつくるAa類の可能性も残ることを記しておきたい。 ※28については、鎌刃の基部を厚く作り、その部分を柄身に平行して穿孔し、鎌柄を挿入するタイプである。形態的にはC類であるが、鎌刃挿入式ではない。同時代資料として掲載する。	東村山市下宅部遺跡 (Ad類、10世紀頃か)	22 	23 	24 	25 

図6 遠江・駿河を除く日本列島における鎌柄の編年的位置

類（夜須町教委1997、註10）、島根県姫原西遺跡でAc類が、B類は、大阪府西岩田遺跡（木製鎌刃）、島根県田中谷遺跡（註11）などで出土している。B類は方形柄頭（西岩田遺跡例）あるいは半円形に近い方形（国府関遺跡例）であり、柄頭幅が柄頭の長さよりも大きいのが特徴である。B類は弥生時代後期には出土しているが、後期後半から主に採用され始める可能性が高い。また、B類のうち、佐賀県川寄吉原遺跡では柄頭が小さなものが出土地している。これは柄頭によって鎌の装着角度に制限が少ないとから、鎌の装着角度を自在に変えることができる鎌柄が出現していた可能性がある。松井和幸氏は、鎌刃の鎌柄への装着角度の分析により、弥生時代中期から後期のもので鈍角になるのは大型の鎌であるとする（松井1993）ことから、川寄吉原遺跡例は大型の鎌刃を鈍角に取り付け、草刈り用等として利用する「除伐用」鎌柄であった可能性が高い（註12）。つまり、通常の鎌柄はA・B類主体で、「除伐用鎌柄」では、柄頭が小さなB類や柄頭が柄身と同幅のC類が存在した可能性が高い。

**古墳時代** 纏向遺跡では、第149次調査の太田池地区での調査で土坑（井戸）底から著名な木製仮面とともに鎌柄B類が出土し、同一層位から出土した土器により庄内期古相に位置づけられている（福辻2013）。また、石川県二口八丁遺跡、千葉県国府関遺跡などでも弥生後期末～古墳前期初頭に位置づけられる鎌柄B類が出土している。この段階で近畿から東日本にも鎌柄B類が出土していることが明らかである。一方で、弥生時代に九州・中国や遠江・駿河で確認されたAa・Ab・Ac類は確認できず、装着部を柄腹側に幅を広げる形状のものは衰退していた可能性が高い。

古墳中期では、B類・C類が出土している。B類は柄の長さが50cm未満の通常の鎌柄で、C類は大鎌柄である。B類は弥生後期から古墳時代前期には方形柄頭であったものが、縦長の圭頭形柄頭に変化していることが読み取れる。また、古墳中期後半から後期前半に位置づけられる大阪府小阪遺跡のAc類があるが、装着部全体を幅広につくるというよりも柄身の一部に段をつけたような状況であり、弥生時代のものが継続的に用いられていたという証拠にはならない。

古墳後期～終末期も基本的にB類が主体で、C類も継続して用いられた可能性が高い。この段階で柄頭が背丸方形で装着部を背側に大きく作る、柄身が屈曲する（外湾気味の）Ad類が出現している（上原1993）。

**奈良時代以降** 奈良時代以降は平城京でC類が出土

しており、遠江・駿河の事例から判断すれば、B・C類が用いられていたことは明らかであるが、C類の方が主体的に用いられた可能性が高い。柄頭は背丸方形か圭頭形である。一方、東京都東村山市下宅部遺跡（註13）のように少ないながらもAd類が継続して用いられる。このことから奈良時代以降はC類を主体に、Ad類・B類が用いられた可能性が高い。

### （3）寺家前遺跡の鎌柄の編年的位置づけ

以上分析したように、遠江・駿河及び全国的な鎌柄の編年的位置から考えると、寺家前遺跡のように装着部を柄身よりも（柄腹側に）幅広に作る事例は、概ね弥生時代中期～後期に位置づけることができるから、寺家前遺跡例は弥生時代に遡らせることができる。さらに、寺家前遺跡例は、島根県姫原西遺跡例と酷似していることから、同時期に位置づけてよいと考える。姫原西遺跡例は弥生時代後期に位置づけられることから、寺家前遺跡例も弥生時代後期に位置づけたい。

## 6まとめ～寺家前遺跡の柄付鎌の位置づけ～

### （1）寺家前遺跡柄付鎌の編年的位置と特質

小論を閉めるにあたり、これまでの内容を要約しまとめとしたい。

寺家前遺跡例は曲刃鎌であること、鎌柄の類例の絶対数が少ないとから今後も継続的に検討することが必要であるが、遠江・駿河の鎌柄の変遷及び全国的な弥生時代～古墳時代を中心とした時期ごとの鎌柄の形態的特徴の分析から、鎌柄は弥生中期～後期に装着部を柄身よりも幅広に作る傾向が確認できること、古墳時代前期以降の鎌柄は基本的に柄頭のみを大きく作るB類が大部分であること、最も形態が類似する島根県姫原西遺跡出土例が弥生後期に位置づけられていることから、古墳前期初頭まで降る可能性はあるものの、中川律子氏の位置付けを追認し（中川2011）、寺家前遺跡例を弥生後期に位置づけたい。

この判断が正しければ、筆者が確認できた中では、柄付鉄刃鎌の現存例としては、日本列島最古の事例の可能性が高く、非常に貴重な事例となる。

また、駿河では弥生時代の鉄製品の本格的な普及が弥生後期以降である（大谷2015）が、鎌柄の形態からみると島根県姫原遺跡例が最も近いことから、鉄器の流入にあたって、太平洋岸だけではなく、日本海側から中部高地などを経由した流通経路も考慮しておく必要があるだろう。

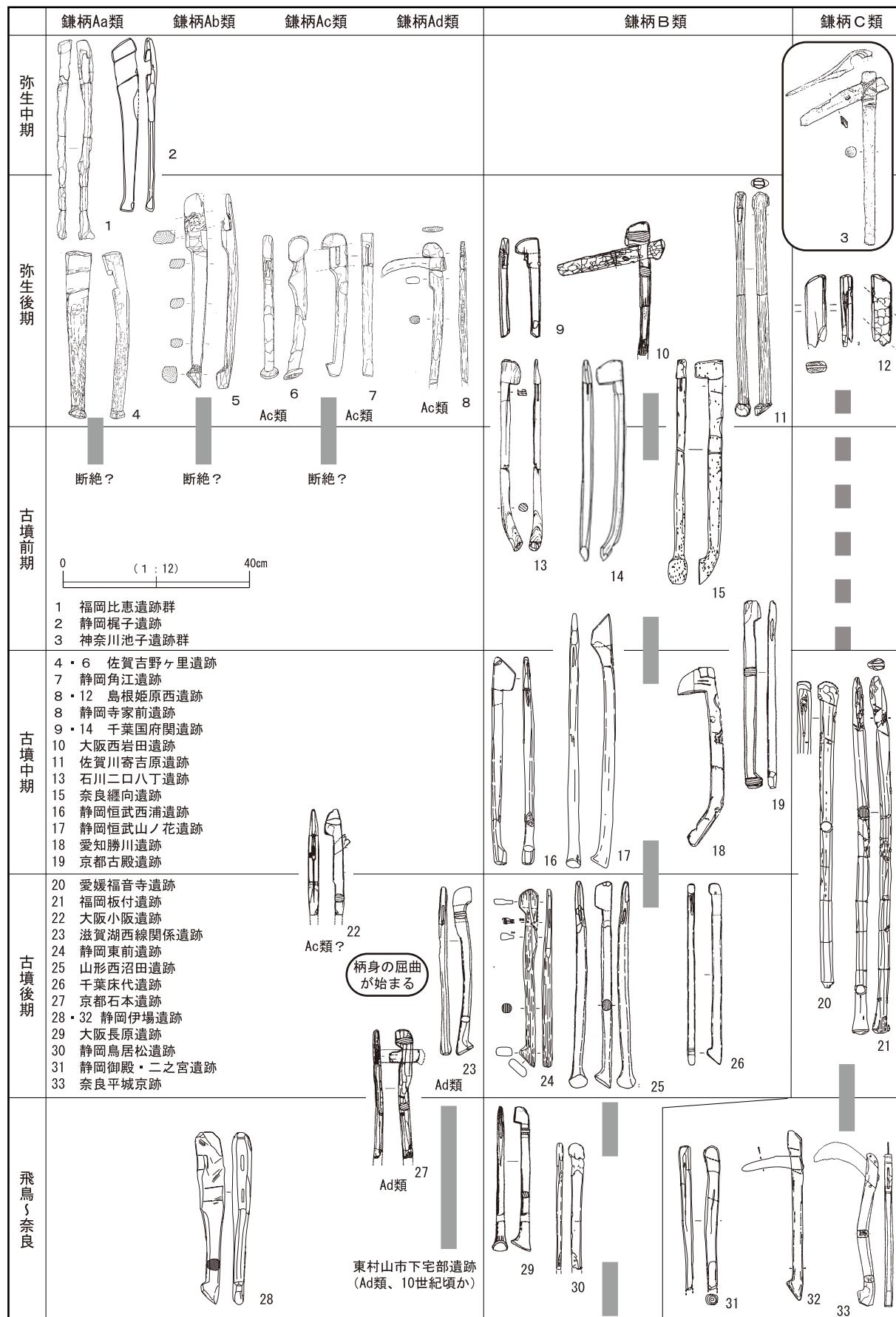


図7 日本列島における鎌刃挿入式鎌柄の編年的位置

## (2) 鎌柄の編年について

鎌は、弥生中期に曲刃鎌が出現し、古墳前期には短冊形鉄刃が盛行する中で、曲刃鎌は一部残存する。

一方、小論の分析により弥生時代の鎌を装着した鎌柄は、装着部を柄身よりも幅広につくるもの（鎌柄Aa・Ab・Ac類）と、柄頭のみを大きく作るもの（鎌柄B類）であることから（図7）、この2者に曲刃鎌が装着される。つづく、直刃鎌が盛行しはじめる弥生後半から古墳前期初頭に鎌柄B類が主体的に用いられるようになり、以後古墳後期までB類が主体的に用いられる。B類は時期が降るにつれて、徐々に柄頭と柄身の幅が同幅に近くなり、茎鎌が出現する中世まで連綿と継続的に用いられた可能性が高い。C類は弥生時代から存在していた可能性が高い。弥生時代は大型の鎌柄に主に用いられ、通常の鎌柄へのC類の採用は古墳中期ごろに行われ、奈良時代には主体的に用いられた可能性が高い。古墳時代中期以降柄頭の幅が小さくなることやC類が盛行することは鎌柄全体が曲刃となる鎌が増加することと関連するとともに、鎌基部の折り返しの部位や角度を調整することで鎌の装着角度を自由に変えることができるようとする工夫で、鎌の形状と装着角度への柔軟性を増すためであったと想定できる。

ここで想像をたくましくすれば、日本独自の短冊形直刃鎌が創出された際に鎌柄の製作に手間のかかるA類は採用されず、鎌柄B類が組合され、それが直刃鎌の普及とともに全国的に普及した可能性も想定できる。また、弥生時代に主に採用されたAa・Ab・Ac類が一部残存し、古墳前期に確認された曲刃鎌は、それらに装着された可能性も考慮しておくべきである。

なお、韓半島の古墳時代併行期の三国時代～統一新羅時代の鎌柄（Jeong 2013、金 2014）については、資料に掲載された鎌柄をみると、B・C類であり、初期鉄器時代に位置づけられる鎌柄はAa類のように看取できる。三国時代以降については日本列島と韓半島で同形態の鎌柄（B・C類）が利用されていたことが明らかである。韓半島と関連（連動）して、鎌柄の形態変化しているのか今後慎重に判断する必要がある。

## 【さいごに】

鎌柄の類例が少ない中で類似するいくつかの特徴から弥生時代後期とすることは強引な位置づけであるとの批判や、鉄鎌の形態的な特徴からは古墳時代中期以降に位置づけるべきという意見が寄せられることが予想される。今回は主に鎌柄の形態分類から寺家前遺跡例

を弥生時代後期に位置づけたが、今後の更なる類例調査を行うとともに調査の進展による類例の増加を俟って再度検証する必要があることはいうまでもない。多くの研究者の御教授・御批判を願います。

ただし、遠江・駿河は比較的鉄器の導入は遅れ、弥生時代後期以降本格化する可能性が高い（大谷 2015）が、比較的古い段階で鎌柄が出土していることから、曲刃鎌だからといって鉄鎌が波及していなかった証拠にはならないことも明記しておきたい。

## 【謝辞】

小論の執筆にあたり、石井智大氏、河野正訓氏、菊池吉修氏、鈴木一有氏、中川律子氏、林大智氏、樋上昇氏に類例や文献等、資料の位置づけなどについてご教示いただいた。銘記して深謝いたします。

## 註

- 1 中川律子氏は、問題提起をすることを前提に、共伴した土器や遠江・駿河の木柄の類似例との比較から寺家前遺跡の柄付鎌を弥生時代後期に位置づけた（中川 2011）ことから、筆者はこの問題提起に対し、筆者なりに位置づけを試みるものである。
- 2 弥生時代・古墳時代の研究者数名と寺家前遺跡の鉄鎌の位置づけについて立ち話をしたが、「弥生時代でよい」という意見と、「古墳時代中期以降ではないか」という意見が半々であった。このため研究者の同意を得るには、静岡県内をはじめ全国的な弥生時代～奈良時代ごろの柄付鎌の比較を行なったうえで寺家前遺跡例を位置づける必要があると感じた。
- 3 小論の分析には影響はないが今後の鎌の装着方法や使用用法を考える上で注目されるべきものであるため、ここに見解を示しておきたい。

寺家前遺跡の報告書では掲載されていないが、中川律子氏の論文（中川 2011）に掲載された写真（写真4）をみると、柄付鎌の出土状況は、報告書等で図化されている鎌刃の装着が逆、つまり鎌柄はそのままの状態で切先が右側を向くように装着された状態で出土しているように看取できる。この見方が正しければ、鎌刃の装着が報告書等で図化された状態とは逆で装着されて実用的に使用されたとする見方と、廃棄される際に、機能を失わせるためか鎌刃を逆方向に差し替えて廃棄した可能性、あるいは中川氏が想定するように（中川 2011）何らかの祭祀に使用する際に鎌刃を差し替えた可能性等が想定できる。

- 4 有東遺跡の木刃鎌の存在から、鉄刃鎌が駿河で使用されていたことが想定される（静岡県教委1983）が、弥生中期の鉄刃鎌は九州の限定されるような状況であり、近畿地方・東海西部を飛び越して駿河で普及していたかどうかについては慎重に検討する必要がある。

- 5 愛野向山II遺跡例については弥生後期に位置づけられ

- ることがあるが（杉山2011）、報告書（袋井市教委2004）では、古墳前期に位置づけている。
- 6 鎌柄への取り付け方法は、装着孔に落とし込む場合を除いて、端部を折り返すことで鎌柄に固定するが、固定する際に折り返す範囲などを調整することで、装着角度は自在に変化させられるものが多い。一方で、柄頭が大きいものは装着角度を自在に変更することが難しいことが想定でき、より用途が狭まる可能性が高い。
- 7 これ以外に、D類の可能性のあるものが伊場遺跡、角江遺跡で出土しているが、柄頭が欠損している可能性があるため、判断が難しい。
- 8 当該事例は奈良時代に位置づけられている（浜松市博1978）が、伊場遺跡では弥生後期以降の木製品が出土しており、この鎌柄が出土した箇所にも弥生時代の遺構が存在していることから、弥生時代の遺物が混在している可能性を排除できないため、本資料が弥生時代に位置づけられる可能性が残ることを記しておきたい。
- 9 池子遺跡例をみると、組合せ式の鍬の刃先を鎌状に細く鋭利に再加工したようにも看取できるため、鍬を転用したものである可能性も考えられる。
- 10 吉野ヶ里遺跡の報告書（佐賀県教委2003）では、惣利遺跡のほか、吉野ヶ里遺跡のAa類と同様の形態として佐賀県土生遺跡・生立ヶ里遺跡などが挙げられており、北部九州ではAa類が一般的であったことが想定できる。
- ただし、これらのAa類について、比恵遺跡群（福岡市教委1991）や惣利遺跡の報告書では「鎌柄」ではなく「工具」柄（の可能性がある）としている（福岡市教委1991、夜須町教委1997）。直接比較するには危険性が伴うが、弥生時代の袋状鉄斧柄（組合式縦斧柄）や板状鉄斧柄とされるものに鎌柄Aa類やAb類に類似する形状のものがある。Ab類は大阪府龜井遺跡出土例（岡村1985）・佐賀県吉野ヶ里遺跡出土例、Aa類は巨摩・瓜生堂遺跡出土例（岡村1985）に類似している。鎌柄に比べて、装着孔の幅が大きいという特徴は確認できるが、手に持つて回転させて（遠心力）で切るという動作をするものとしての共通性があると判断すれば、鎌柄と斧柄（縦斧柄）の形状が類似していることも十分想定可能である。したがって、Aa・Ab類に斧柄が含まれる可能性はあるものの、鎌柄Aa・Ab類は弥生時代の形状として考えて差支えないと考える。
- 11 田中谷遺跡例は、柄頭が一部欠損している可能性がある。
- 12 神奈川県池子遺跡例や、遠江・駿河の事例、吉野ヶ里遺跡等の事例あるいは千葉県国府関遺跡等の一体造りの鎌をみると、弥生時代に位置づけられるものは、鎌刃挿入式は鎌刃を鋭角に取り付けられるように装着孔を穿孔し、一体造りのものは鎌刃を鋭角に取り付けているものが多い。韓国光州新昌洞遺跡例（Jeong2013）に掲載された初期鉄器時代に位置づけられるものも鋭角に取り付けられるような穿孔形態であることから、弥生時代の「通常の鎌柄」には鋭角あるいは直角に取り付けられるものが多かったことが想定できる。
- 13 東京都東村山市下宅部遺跡については、報告書を確認

することができず、東村山市のホームページで写真を確認した。写真を見る限り、背側に向かってやや湾曲し、装着部を幅広につくられていることから、ここに示したようにAd類に位置づけられる可能性が高い。

## 引用・参考文献

### 【主な論文・資料集】

- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学』出土木製品用材データベース 海青社  
 上原真人 1993 「鎌」『木器集成図録 近畿原始篇』 奈良文化財研究所  
 上原真人 1994 「西日本の農具の変遷」『古代における農具の変遷』 静岡県埋蔵文化財調査研究所ほか  
 大谷宏治 2015 「遠江・駿河における木製品からみた鉄器化の様相」『考古学研究会東海例会2015年2月資料 木製品からみた鉄器化』 考古学研究会東海例会  
 岡村秀典 1985 「鉄製工具」『弥生文化の研究』5 道具と技術I 雄山閣  
 横原考古学研究所 2000 『大和木器資料I』  
 川越哲志 1977 「弥生時代の鉄製収穫具について」『考古論集—慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集—』 松崎寿和先生退官記念事業会  
 河野正訓 2011 「古墳時代前期の曲刃鎌」『古文化談叢』66 九州古文化研究会  
 河野正訓 2014 『古墳時代の農具の研究』 雄山閣  
 静岡県埋蔵文化財調査研究所ほか 1994 『古代における農具の変遷』  
 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 『島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』  
 杉山和徳 2011 「東海地方の鉄器の出現」『研究紀要』17 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
 杉山和徳 2012 「東海地方の鉄器化の様相」『静岡県考古学研究』43号 静岡県考古学会  
 竹内直文 2000 「弥生時代の遺構と遺物」『県道浜松袋井線緊急地方道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』磐田市教育委員会  
 武田寛生 2003 「東海地域における後期古墳出土農工具について」『研究紀要』10 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
 寺澤 薫 1991 「収穫と貯蔵」『古墳時代の研究』4 雄山閣  
 都出比呂志 1989 「農具鉄器化の諸段階」『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店  
 中川律子 2011 「藤枝市寺家前遺跡から出土した柄付き鉄製鎌について」『研究紀要』17 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
 奈良文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』  
 平野吾郎 1994 「稻刈り鎌の出現」『地域と考古学』 向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会  
 福辻 淳 2013 「纏向遺跡の木製仮面と土坑出土資料について」『纏向学研究』1 桜井市纏向学研究センター  
 松井和幸 1985 「鉄鎌」『弥生文化の研究』4 雄山閣  
 松井和幸 1993 「鉄鎌について」『考古論集—潮見浩先生退官記念論文集—』 潮見浩先生退官記念事業会

松井和幸 1994 「鉄製農具の変遷」『古代における農具の変遷』 静岡県埋蔵文化財調査研究所ほか  
Jeong su og 2013 「古代韓国の木製品出土の現状と種類」『韓日古代木製遺物の研究成果と今後の課題』 国立昌原文化財研究所 (ハングル)  
金度憲 2914 「韓国の三国時代農器具」『武器・武具と農工具・漁具』 国立釜山大学校博物館  
李健茂・李榮勲ほか 1989 「義昌茶戸里遺蹟発掘進展報告 (I)」『考古学誌』1 韓国考古美術研究所 (西谷正監訳) 1990 『義昌茶戸里遺跡発掘調査進展報告』 しこうしゃ所収)

#### 【主な報告書・市町村史】

浅羽町教育委員会 1999 『五ヶ山B 2号墳』  
磐田市教育委員会 1995a 『遠江堂山古墳』  
磐田市教育委員会 1995b 『御殿・二之宮遺跡第6次発掘調査報告書』  
磐田市教育委員会 2003 『県道浜松袋井線緊急地方道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』  
掛川市教育委員会 2003 『掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡発掘調査報告書II』  
かながわ考古学財団 1999 『池子遺跡群X No.1-A地点』  
菊川町教育委員会 2004 『長池古墳群4号墳発掘調査報告書』  
後藤守一 1939 『松林山古墳発掘調査報告』  
佐賀県教育委員会 2003 『吉野ヶ里遺跡』  
静岡県教育委員会 1983 『有東遺跡』 I 下  
静岡県教育委員会 2001 『静岡県の前方後円墳』  
静岡県埋蔵文化財センター 2012 『寺家前遺跡I』  
静岡県埋蔵文化財センター 2013 『寺家前遺跡II』  
静岡県埋蔵文化財センター 2014a 『寺家前遺跡III』  
静岡県埋蔵文化財センター 2014b 『寺家前遺跡IV』  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988 『大谷川(稻妻地区)』  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994a 『瀬名遺跡III』  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994b 『川合遺跡』 遺物編3  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995a 『長崎遺跡IV』  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995b 『池ヶ谷遺跡III(遺物編)』  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996a 『角江遺跡II』 遺物編2(木製品)  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996b 『瀬名遺跡V』  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 『恒武西宮・西浦遺跡』  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 『菊川市下平川の遺跡群』  
島根県教育委員会 1999 『姫原西遺跡』  
内藤晃・大塚初重編 1961 『三池平古墳』  
浜北市 2004 『浜北市史』資料編 原始・古代・中世  
浜松市教育委員会 2009 『鳥居松遺跡5次』  
浜松市教育委員会 2012 『梶子遺跡13次』  
浜松市博物館 1978 『伊場遺跡遺物編I』  
浜松市博物館編 1997 『梶子北遺跡』 木器編

浜松市博物館編 1998 『山ノ花遺跡』 木器編  
浜松市博物館編 2002 『伊場遺跡遺物編8』(木製品II・金属器・骨角器) 浜松市教育委員会  
浜松市博物館編 2004 『大蒲村東I・II遺跡』  
浜松市博物館編 2008 『東前遺跡II』  
福岡市教育委員会 1991 『比恵遺跡群(10)』  
袋井市教育委員会 2004 『愛野向山II遺跡』  
藤枝市史編さん委員会 2007 『藤枝市史』資料編1 考古  
細江町教育委員会 2005 『岡の平遺跡発掘調査報告書』  
森町教育委員会 1996 『森町飯田の遺跡』  
夜須町教育委員会 1997 『惣利遺跡I(図版編1)』

#### 図の出典

- 図1 寺家前遺跡(静岡県埋文センター2013)、角江遺跡(静岡埋文研1996a)、  
図2 1(静岡県埋文センター2013)、2(静岡県教委1983)、3(森町教委1996)、4(磐田市教委2003)、5(静岡埋文研1994b)、6(袋井市教委2004)、7・8(浜北市2004)、9(静岡県教委2001)、10(掛川市教委2003)、11・12・14(静岡埋文研2009)、13(磐田市教委1995a)、15(浅羽町教委1999)、16(菊川町教委2004)、17・18(藤枝市2007)、19~23・26・27(静岡埋文研ほか1994)、24・25(浜松市博2002)、28(静岡埋文研1994a)  
図3 1~10(河野2011)  
図4 有東遺跡例(静岡県教委1983)、角江遺跡例(静岡埋文研1996a)、寺家前遺跡例(静岡県埋文センター2013)、滋賀湖西線関係遺跡(奈文研1993)、恒武山ノ花遺跡例(浜松市博1998)、大宰府跡(松井1993)、姫原西遺跡例(島根県教委1999)、纏向遺跡例(福辻2013)  
図5 1(浜松市博2002)、2(細江町教委2005)、3(静岡県教委1983)、4(静岡埋文研1996a)、5(浜松市博1978)、6(静岡県埋文センター2013)、7(静岡埋文研1994b)、8(静岡埋文研2000)、9・10(浜松市博1998)、11(浜松市博2008)、12・13・18(浜松市博2002)、14(浜松市博2004)、15(浜松市教委2009)、16・17(磐田市教委1995b)、19(静岡埋文研1994a)  
図6 1・2(福岡市教委1991)、3・4(佐賀県教委2003)、5(島根県教委1999)、6~8・10・12・13・16~18・22~25(奈文研1993)、9・14・19~21(静岡埋文研ほか1994)、11(島根県古代文化センター他2006)、15(福辻2013)、26(松井1993)、27(島根県教委1999)、28(かながわ考古学財団1999)  
図7 1(福岡市教委1991)、2(浜松市博2002)、3(かながわ考古学財団1999)、4・6(佐賀県教委2003)、5(静岡埋文研1996a)、7・12(島根県教委1999)、8(静岡県埋文センター2013)、9・13・14・25・26(静岡埋文研ほか1994)、10・11・18~23・27・29(奈文研1993)、15(福辻2013)、16(静岡埋文研2000)、17(浜松市博1999)、24(浜松市博2008)、28・32(浜松市博1978)、30(浜松市教委2009)、31(磐田市教委1995b)、33(松井1993)